

中世・近世

今からおよそ1200年前、延暦13年(794)都が京都へ移されてからは日本と大陸との交流も少なくなり、従って大陸への玄関口としての難波東成が歴史の舞台に華々しく登場することもなくなりました。しかし、この地が瀬戸内地方と京都・奈良・紀州などを結ぶ交通の大事な場所であり、古くからのさまざまな文化や技術が積み重ねられてきた場所であることに変わりありません。東に広がる低湿地の開拓は次々と進み、南北朝の時代には現在の東成区域の大半が、「新開荘」として四天王寺の寺領に組み入れられるほどでした。また、深江には古代に大和笠縫邑から移り住んだという笠縫氏があり、代々の伊勢神宮や天皇家の大事な儀式に用いる菅笠、円座や翳(さしば・柄のついた日除け)を調進するほか、一般用にも座(組合)を結成して奈良・京都を中心とする畿内一円に専売権を獲得していました。

桃山時代の豊臣秀吉の時代に新開荘の荘名が廃止されますが、江戸時代になると東成区域は深江村を除き大今里・東今里・西今里・本庄・中道・木野などの村々は大阪城代の松平領となり、後には幕府の直轄領またはそれに準ずる扱いを受けることになりました。東成の地は大阪城の東を囲み、米・麦・綿・菜種などの豊かな農産物を産し、平野川を通じて河内方面との水運に恵まれるほか、暗越奈良街道の出発点として大勢の人々が行き交い賑わいました。



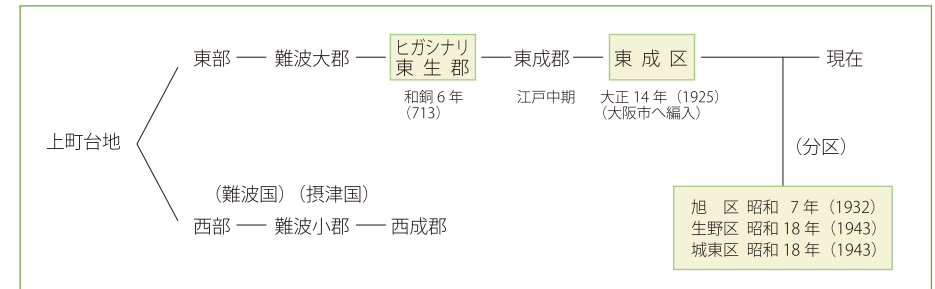
大今里3丁目14番「いまざとならみち」道標周辺
(東成区役所ホームページより)



歌川國貞/画「二軒茶や風景(浪花百景)」大阪市立中央図書館蔵

近現代

やがて明治になると、廃藩置県によって大阪府が誕生し、当区内の11の村々は新しい土地制度の下に置かれ、明治22年に郡区市町村編成法が公布されて大阪市が東西南北の4区となった後、大正14年に大阪府東成郡の大半が大阪市東成区として編入されたのです。この時の東成区は、中本・鶴橋・鯉江・榎並の4町と神路・小路・生野・城東・榎本・城北・古市・清水の8村で編成され、上町台地の東側の大半を占める広大な面積を持っていました。そのため区役所も旧鶴橋町役場の本庁の他、今福と千林にも出張所を置かなければなりませんでした。昭和になると都市化が進み人口も増えてきたので、7年に旭区、18年に生野区・城東区が分区して現在に至ります。令和7年には区制100周年を迎えます。わが東成は大阪東部で最も古くから開けた土地として1300年の間、名を伝えているのです。



ホームページでも東成区の紹介をしています!

ホームページからも区の概要や歴史などをご覧いただけます

◆東成区ホームページ「区を紹介」



▲東成区のHPにアクセスします